

強制連行の朝鮮人

沖縄戦の悲劇追跡

「アリランのうた」沖縄編映画化

二十万人の死者を出したといわれる沖縄戦の犠牲者の中には、朝鮮半島から強制連行された人たちも多かった。その悲劇が初めて記録映画化される。戦時中の「朝鮮人軍夫」「慰安婦」を描いた「アリランのうた」オキナワからの証言。撮影はほぼ終了、二十九日には上映委員会が発足、七月から、全国のトップを切って沖縄各地で上映される。



神奈川県内に住む監督で女性作家の朴壽南(パク・スナム)さん(妻は「同胞」の沈黙の恨(ハン)を記録したかった。重い口を開いてくれた人々の証言から日本軍の残虐さと、被害者の状況がいくらかでも明らか

証言を収録

7月、初上映

支援者の協力で始まった。一九四四年ごろ始まる沖縄への強制連行は「約一万人(朴さん)といわれる。日本軍は、同胞に爆弾を背負わせて米軍に向かわせるなどしている。研究者などの話では生存者は約三千人程度ではないか」ともいふ。

「朝鮮人軍夫」「慰安婦」の状況について証言を集める撮影隊。マイクを持つているのが朴監督(19日、沖縄本島・玉城村で撮影開始は約三年半前。

になったと語り」と証して地元住民、研究者、旧日本兵など約百人から話を聞いた。撮影フィルム(16mm)は十万円を越す。

「もうひとつのヒロシマ」「アリランのうた」で、日本に強制連行された朝鮮人被害者の実相を描いた。「オキナワからの証言」は、日本人の戦争被害が激しければ激しいほど、その周辺に同胞の死があるとの朴さんの思いと「ヒロシマ」を見た十八歳の元「慰安婦」が、初めてカメラの前で証言してくれた。旧日本兵の証言が映画に深みを与えた」と話す。

資金は総額で約八千万円かかる予定だ。今でも、約二千万円不足しているという。撮影隊は四月から編集にかかり、二時間弱の映画にまとめる。

映画の内容やカンパについて問い合わせ先は「アリランのうた」オキナワからの証言」上映委員会(電話〇九八・八八五・四三五)へ。